

浄土宗の日曜学校

——明治・大正期の動向を中心として——

永井 隆 正

(佛教大学非常勤講師)

はじめに

およそ日曜学校とは、宗教教育研究者の間 寛之によれば、「自教の教育主義に依って児童に宗教的陶冶を施し、以て一般に人として必要なる高き品性と堅き信念とを涵養せんとする、宗教的教育機関の一つである」といわれる⁽¹⁾。

この定義からすれば、浄土宗の日曜学校の研究は、宗門の児童教化の足跡を求めることのみならず、浄土宗の教育理念を考える上においても大きな課題となるものである。そこで、本稿は大正期に宗門の社会事業の一つに位置づけられた日曜学校について、他宗派の動向と対比しながら、宗務所社会部で統一的な仏教日曜学校教材が開発される大正

末期までの動きを考察しようとするものである。

一、日曜学校の揺籃期

仏教日曜学校の前身は少年教会であるといわれている。神根愍生によれば、明治十三年頃、博多万行寺の七里恒順が毎月七日に少年会を、毎月四日に少女会を開き、真宗義を平易に講話されたという⁽²⁾。また、同年頃、芝増上寺の福田行誠が少年講を創めたというが、その内容は詳しく伝わっていない⁽³⁾。

その後、各地に少年教会開設の気運が勃興し、とくに築地本願寺では、明治十九年に児童雑誌『教草』が発刊され、少年教会に教材を提供するようになった。神根によれ

ば、当時の少年教会の内容は、「礼拝、読経、法話、仏教唱歌等を課し、法話には釈尊伝、祖師伝、本生譚、簡単な教義等が用いられ」⁽⁴⁾ていたという。

明治二十年頃から、少年教会は各宗とも全国的に普及していくが、当時の浄土宗の少年教会の組織と内容について見ることとする。少し時代は下るが、大阪市にあった仏眼教会少年会⁽⁵⁾（明治三十二年六月開設）を例に示すことにする。

一、組織 仏眼教会の事業として、本会々員の子女并市内附近の熱心なる有志子女（四、五歳以上十五、六歳まで）を以て組織す。

一、目的 家庭教育を扶助し、学校教育との連絡を謀り、兼て宗教的訓陶を与へんため開催す。

一、経営者 正会員中村正道以下卅余名。

一、会員数 五百八、九十名、毎回出席者、七、八十名以上百二、三十名迄。

一、事業 毎日曜日午後一時開筵。式、略懺悔、一枚起請文、会歌、読誦（四恩を平易に綴りたる文を口授す）、講演（仏教倫理を極平易に約十分間説く）、唱歌（西

方楽・野上大僧正の御作歌）、四弘誓願、短句経文并唱歌教授、古今東亜聖人君子賢士貞婦の孝悌忠信の佳話事蹟、お伽噺、室内遊戲等をなし、三時を以て終り。

本人の所望に由り、短句経文、回向文、礼讃、小経、観經、大経の訓読及捧読全部を修了せしを以て、第六期全科卒業証書を与う。⁽⁶⁾尚卒業後高等科を開催し、三祖言行録、徒然草、仏教単語名目、唱歌、作文、習字、講話会、討論会等をなさしむ。又法式礼讃の音拍等も訓練せしむ。その他、夏季講習会、運動会等あり。

一、維持方法 少年会々費并本会の通常会計より支出す。⁽⁷⁾

この仏眼少年会はその母体である仏眼教会が明治三十一年八月六日に発布された教令第十七号教会条例⁽⁸⁾に準じて設立されたものであり、その目的とするところは、「勅語の聖旨を遵奉し、仏教の真理に依憑し、内心立命を得せしめ、外報国の実を挙ぐる」（略則第一条）ことであり、その目的遂行のために、「講義、法話、演説及少年教化、職工伝道、其の他慈善事業を行う」（同第二条）としている。したがって、仏眼少年会は単に独立した児童教化組織

としてではなく、成人教化に連続する組織としてとらえられているところに注目しなければならない。そのことは、教育勅語を基本とした仏教倫理を授けるだけに終ることなく、現在から見ると、相当高度な勤行練習や、浄土宗の知識を養えるように配慮されていることから見ても、教会全体の教化姿勢を窺わせるものである。また、寺院と家庭との連携だけでなく、学校教育との連絡を求めていることも注意しなければならない。即ち、学校における教育勅語に基づく修身教育の補充的役割を寺院の側から積極的に働きかけていることである。このような例は仏眼少年会のみならず、当時の少年教会の一般的傾向であったようである。

ところで、仏眼少年会の活動のなかに「お伽噺」の時間があるが、これは当時新たに勃興してきた児童文学を利用した口演童話である。内山憲尚によれば、口演童話は巖谷小波によって明治二十九年に始められ、久留島武彦等によって拡まったといわれている⁽⁹⁾。

この口演童話に力を入れた浄土宗の日曜学校としては、少し時代は下るが、西島義豊による東京四谷西念寺こどもの会⁽¹⁰⁾(明治四十一年開設)がある。この会は、毎月第二日

曜少女部大会、第四日曜少年部大会が開かれ、例えば、明治四十二年八月の少女大会では、君が代で始まり、口演童話と唱歌が中心となり、幻灯も行なわれ、螢の光で終わっている。とくにこの会で用いられる「お伽噺は総て仏典の説話に基き、間接の伝道を目的」としていたという。この会は仏眼少年会のように浄土宗の教義や儀礼を注入しようとするものではなく、子どもの興味を第一義に考えて内容が構成されていた。しかしながら、内山憲尚も、「お伽噺をそのまま教材の代りにこどもに与えて、こどもたちをお寺のこども会に繋ぎ止めたのである⁽¹¹⁾」と指摘するように、仏教的精神の背景をもたないお伽噺を用いて、子どもの興味に迎合していたところもあったようである。

ところで、少年(教)会、こども会、日曜(教)会等々呼ばれていた児童教化組織が、いつ頃から、日曜学校という名称で呼ばれるようになったのであろうか。神根愍生によれば、「明治三十八、九年頃から日曜学校なる名称が用いられ、数年の後、京都の道光寮同人の日曜学校啓発運動が冲天の意気を以て行われ、機関雑誌『日曜日』の発行、讃仏歌及びカード編纂、みな当時の日曜学校界を指導する権

威であった。この啓蒙運動は忽ちにして燎原の火の如くに全国に伝わり、日曜学校の創設、改善が行われ、今日（筆者註大正期）の仏教日曜学校の基礎をここに確立した⁽¹²⁾と述べられている。

このような仏教系の日曜学校の動きは、その背景にキリスト教日曜学校の活動に大きな影響を受けて展開したものと考えられる。即ち、明治二十三年に「万国共通日曜学校」（福音週報及び基督教新聞）が田村直臣によって翻訳され、明治三十四年には、月刊雑誌『日曜学校』（日曜学校社）が刊行されている。さらに、明治四十年には日本日曜学校協会が設立され、第一回大会が開かれるに及んでいる。同年、田村直臣は『廿世紀の日曜学校』（驚醒社）を刊行したが、この書は日本人の手による最初の日曜学校論で、原理、歴史、教授法から建築法までも述べられている。田村は、さらに、明治四十五年には十一年制級別案の編纂を完結している。この教案は幼稚科二年、初等科三年、中等科三年、高等科三年に分級したもので、「××科教師之友」と題されていた。このなか幼稚科一、二年には、各学年五十二種のカードが配されていた。

このようなキリスト教及び真宗の動きに対して、浄土宗はいかなる対応をしていたであろうか。例えば、東京浅草の道林寺少年教会は開設が明治三十四年五月であるが、明治三十九年当時の活動内容として、「礼拝、読経、唱歌、講話等、専ら往生極楽の信行を注入し、兼ねて教育科学の応用を試み、時々カード及冊子の類を授け解釈を与う。春秋に大会を開き、又夏期には一週間已上修養の集会を開く」としている。このなか「カード及冊子」を用いていることに注目しておかなければならない。しかし、それらがいかなる内容のものであったか詳しい記録は残っていないが、ともかく、明治三十年代の浄土宗の少年教会のなかにも、教材として、カードや冊子が用いられたことを示す貴重な記録である。

この道林寺少年教会では、例年、礼拝、講話会の夏期修養会を開いていたが、明治三十九年には、修身、英語、算術、読書の補習講習会を開いている。このなか修身の教材としては、明治三十八年刊の安藤正純の『仏教修身読本』（東光社）が用いられている。この書物は教育勅語に基づく仏教日曜学校の最初の教案集であるといわれている。ま

た、英語では、英文仏陀の光や石塚竜学作の英文御本願を教えたとしている。

道林寺少年教会よりも、学校教育の補習ということを明確に会則に表わしたところもある。例えば、愛知東三河明照少年会⁽¹⁵⁾は、第一条に「み仏の聖訓を奉じ、四恩に報じ敬上慈下の美德を養ひ、小学校児童の宗教教育補習感化を為すを目的とす」とあり、第二条に「毎月二回已上日曜学校を開催す」としている。とくに「宗教教育の補習感化」という目的は、明治三十二年の訓令第十二号、いわゆる宗教教育禁止令によって、学校教育内での宗教教育が排除されてしまった状況のなかで、仏教日曜学校が少なくともその補充的役割を果たそうとする意気込みが読みとれるのである。

このように明治期の仏教日曜学校は、一応の内容と形式を整えていくが、浄土宗においては独自の教案やカードは生まれておらず、いまだ揺籃の時代であった。このようななかで、仏教系の日曜学校に大きな影響を与えた刊行物が明治四十四年に生まれている。高橋順次郎編になる『仏教主義統一日曜学校教案』（日曜学校教案発行所）である。

その内容は、一般倫理に相当する仏教の教義を選んで五十七条の教目を定め、その一々に説示と図解とを施した教案である。しかも同時に、高橋編、曾我五鼎図案の『統一日曜学校用カード』（同上）も案出された。このカードは東海道五十三駅に擬し、臨時駅も加えられた五十七種の石版刷カードで、さらに修了証四葉が付けられていた。⁽¹⁶⁾

二、形式・内容の統一化

大正年間における仏教日曜学校は長足の進歩をなし、確固たる地位を形成するに至った。その先がけとなった出来事は、大正四年七月に発布された本派本願寺の仏教日曜学校規程⁽¹⁷⁾である。即ち、「仏教日曜学校は本宗二諦の教義に依り特に児童の徳性を涵養するを以て目的とす」（第二条）とあり、さらに「前条の目的を達せんがため小学校及家庭と聯絡を取り日曜日を利用し宗教及道德の要旨を授く、但し地方の状況に依り兼て手芸作法等を教うることを得」（第三条）と定めている。このような規程の上に、教材の提供、教法の研究に資するために、『日曜教團』『ルムビニ』等の月刊誌の発行をはじめとして、正信偈、讃仏

歌、カード、出欠表用紙、校旗、徽章等に至るまで、本山学務部指定のものが出されている。さらに、大正九年には、学務部より『日曜学校概要』が刊行されている。そこには日曜学校の目的、例日行事及び時間割、例日行事要項、年中行事、校訓、教師心得、訓練要領、教授要領、管理要領、学校衛生、日曜学校法規摘要等を載せ、これに聖訓、正信偈、十二札、領解文、讃仏歌を加え、附録として、「仏教日曜学校の使命とその精神」「家庭に於ける宗教々育」の二論文が添えてあった。このように本派本願寺では、本山当局の積極的な日曜学校に対する指導性が見られるのである。

また、真宗大谷派からは、大正七年に、竹中慧照により『日曜学校の経営』（法蔵館）が刊行されている。これは仏教日曜学校の経営法をまとめた最初のものとして注目されるもので、その内容は、第一篇、序論、組織と方法、教授課目、訓話とお伽噺。第二篇、カード論、奨励論。第三篇、行事及儀式からなっている。このなか教授課目の選択と配列はキリスト教日曜学校のを参考に左記のような配列を試みている。

年齢	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
経文	正信偈	正信偈及讃	和讃	正信偈	和讃	正信偈	正信偈	正信偈
物語	印度の昔物語	仏伝中の興味ある物語、 語、 仏弟子の逸評	和讃	和讃	和讃	和讃	和讃	和讃
教課	正信偈中の人名の記憶	親鸞聖人伝	七高僧の伝、 各宗祖師の人名、 正信偈和讃の解釈	和讃	和讃	和讃	和讃	和讃

一方、浄土宗においては、明治末期から少年教会機関誌や、教案、教材を求める声が出始めていたが、キリスト教や本派本願寺の積極的な動きにもかかわらず、宗務当局の動きは鈍かった。宗務当局の消極的な態度に対して、例えば、大正四年四月、友松圓諦は『浄土教報』⁽¹⁸⁾誌に、「児童教化に就て」と題する論説を発表し、(一)勅修御伝の児童に読み得るような抄訳抜粋の印刷、(二)カードの印刷、(三)児童教化事業の統一、(四)機関雑誌の発刊、等々を要望している。さらに、大正六年九月には、西島義豊も『浄土教報』⁽¹⁹⁾

誌のコドモ欄に、「真宗を見よ——謹んで此記事を浄宗当局に捧ぐ——」と題し、本派本願寺教学課主権による第二回日曜学校講習会での討究内容を伝えた上で、「真宗は上から策勵して下に及ぼしているが、本宗は下から騒ぎ立てて居て、上が冷ややかなのである。将来をしては確かに本宗に望があるが併しだ、一体、我当局者は吾々のこの年来の絶叫と仕事に、どうした、何をした」と悲痛な叫びをあげている。

このような浄土宗の日曜学校指導者の宗務当局への要望がある一方で、浄土宗の日曜学校指導者がともすれば仏教の教えや自宗の教えを子どもに伝えることを疎かにしているのではないかという疑問も出ている。例えば、大正七年七月の『浄土教報』⁽²⁰⁾誌には、「仏教のコドモノ会は基督教の日曜学校に比較して仏様を説くことが少ないようです。無論之れには理屈もありましょうが何故恁んな処まで積極的態度に出ないのでしょうか。徒らに小学校の学芸会を真似る計りが本能でしょうか。もっと宗教的感化の能率を増進することが宗教家としての立場でないでしょうか。世の機嫌を憚てなら『このことを云わずばあるべからず』と

高唱し給いし宗祖の弟子として流を汲むことが出来ましかうか」と疑問を提示している。このことはすでに述べた口演童話や唱歌や遊戯等に重点をおいた指導がなされるためであり、また、本派本願寺のように「本宗二諦の教義に依り」という明確な指導規程が欠如しているためでもある。また別の角度から見れば、宗義に根ざした教材、教案がないことをいみじくも露呈していることに外ならないのである。

このような宗務当局や日曜学校指導者への要望とは別に、地道に指導者自ら教材を工夫しようとした動きもある。例えば、大阪生玉銀山寺子供会⁽²¹⁾(大正四年開設)では、会長の末高了玄の編輯になる『仏教読本』が用いられていた。その内容は、第一編初等科には釈迦伝(誕生、出家、苦学、成道説法、涅槃)、高等科には玄奘三蔵、善導大師、聖德太子、宗旨として各宗の大綱が平易に記され、第二編には、仏法僧、神仏の区別、崇拜と信心、迷信と正信、三心等が書かれていたという。この『仏教読本』が銀山寺子供会のみ使用教材であったのか、他の日曜学校にも配布されていたかは不明であるが、ともかく、仏教のみ

ならず浄土宗の教を教科書として用いようとする努力は当時としては高く評価されなければならないことである。

このような日曜学校の指導者からの要望や努力の積み重ねは、ついに本山や宗務当局を動かすことになるのである。まず、大正八年六月十三日に、総本山知恩院は「少年会日曜学校組織奨励規程」⁽²²⁾（山令第一号）を發布し、「総本山八門末寺院ノ僧侶ニシテ少年会日曜学校ヲ経営シ満三年以上児童感化ニ従事シ成績優良ナルモノヲ特殊布教師ニ選任ス」（第一条）とし、日曜学校等の指導者に布教師としての待遇を与えている。また、「優良ノ児童ニ対シテ褒賞ヲ行ヒ之ヲ旌表ス」（第二条）としている。このような奨励規程は末寺にますます日曜学校の組織化を押し進めることになるが、大正十年四月、やっと宗務所庶務部において、日曜学校執行順序の参考案が作製されるに至った。

日曜学校執行順序⁽²³⁾

- 一、打鐘「振鈴」整列（定刻前五分乃至十分）
- 二、一同講堂「仏前」に入る（入口にてカードを受取るを便とす）

A、礼 拝

B、月 影

C、おつとめ

D、訓話 校長及主任（二十分）

三、各組へ各々入室（主任教師引率）（五分）

A、教話

讃仏歌及讃仏歌遊戲教授（四十五分）

B、休憩（出席点検）——（十分）

C、おはなし（主として童話）カード配附（五十分）

四、一同講堂に入る

A、次回の注意事項、その他の報告

B、讃仏歌

C、礼 拝

五、退場 散会

。「おつとめ」は黙禱又は祈願文、歎徳文、礼讃文、信楽文等を読む

（此文の一定すべきは宗旨として最も必要なるに依り目下考案中なれども御高見あらば御申出を乞う）

。訓話 これは日常の管理訓練を主とし又聖句の暗誦及

説明も可

教話

- 1、これは教理信仰を中心となし
(勿論教理そのものをも含む)
- 2、道徳的徳目
- 3、其他仏教的儀軌、仏教語の解釈等
。おはなし 興味を中心とせるお伽噺の類

特に幼年のものの為にこれは分級の複式制編成を旨としたもの

ところで、このような執行順序が定められても、教話やおはなしの材料は、この時点では統一されたものは刊行されていないのである。さらに讀仏歌、遊戲等も同様であることはいうまでもない。故に、既に実施されている種々の日曜学校の執行内容を集約して、一応の規準を作製したにすぎない。⁽²⁴⁾

このような宗務当局の動きとは別に、大正十年四月より、日曜学校に必要な読物を提供する浄土宗の児童雑誌『月影』(月刊)が三重県四日市西福寺内月影社より刊行されたことは特筆すべきことであろう。

上述してきたような浄土宗の日曜学校の動きに対して、

理論的指針を与えた浄土宗門人による最初の日曜学校論が大正十年七月に刊行されている。それは鈴木積善の『児童宗教教育の理論と実際』(四恩報答会)である。本書の内容は題名からも分るように宗教教育論であるが、そのなか第三篇の宗教教育の実際の後編として、日曜学校の経営法が記されている。その内容構成は、第一章日曜学校の使命、第二章名称及び規則、第三章設備、第四章生徒、第五章組の編成、第六章教師、第七章学科及び教科、第八章教授法、第九章執行の順序、第十章賞罰及び奨励、第十一章経費、第十二章年中行事と特別日、第十三章夏期植民と児童図書室、第十四章青年処女部の組織及び指導から成っている。鈴木は宗教大学社会事業研究室の出身で、在学中に児童研究会を組織し、宗教大学日曜学校も指導している。

鈴木によれば、「日曜学校は宗教的教育機関であると共に又特殊的には保護的機関たるべく、従って、単に教室内の教授訓練に止らずして、社会的にもその活動範囲を拡張し、社会的教化機関とも連絡を保つべき必要と使命とを有しているものである」⁽²⁵⁾とされる。鈴木の日曜学校に対する考え方は、関寛之や本派本願寺の規程と基本的には同じ

であるが、ただ、鈴木の場合は、日曜学校にも、両親が働かざるを得ないような「家庭に代り宗教的・道德的訓練を施すと同時に、消極的には彼等をして悪い環境から遠ざかしむる責任がある」として⁽²⁶⁾いる点は、特徴があるといえよう。また、このことは社会事業を学んだ鈴木⁽²⁷⁾の立場を如実に物語るものでもある。

ところで、鈴木の日曜学校論全てについてここでは語ることが出来ない、今は上述してきたことに関連する日曜学校の教科目の取り扱いについて見ることにする。鈴木は日曜学校で課すべき教科目として、(一)説話、(二)唱歌、(三)遊戲をあげる。このなか説話として教授されるべきものは、①教話、②伝記並に聖句、③物語の三に大別される。

① 教話

先ず教理及び信仰に関するものとしては、仏の慈悲、仏の智慧、本願、名号、念仏等）、仏の力即救済（光摂、護念、来迎、往生等）、仏出世の本懐、教主としての釈迦牟尼如来、因果、業報、輪廻、冥加等である。又これに因みて儀式及法要等に関する知識及び心得をも授くべきである。即ち焼香、献花、灯明、合掌、礼拝及び斎戒沐浴等。

又六金色、精進等のこれに因みて普通語となっているものの説明等である。勿論、本願、名号、念仏、来迎、往生等は、解題、釈名をすることを意味するのではなく内容的にこれを話し、又単直信仰せしむるのである。

次に処世に関するものとしては、克己、勤勉、忍耐、慎言、節操、戒酒、懺悔等（自利的）、及び、慈悲、博愛、公益、報恩、感謝等（利他的）である。⁽²⁷⁾

② 伝記並に聖句

教材として取るべき伝記としては、教祖、仏弟子、宗祖を初め、その他の古今の高僧及び一般的の篤信者の伝記等である。

次に、教祖宗祖等の聖訓を抽象し帰納したる聖句は、教話と関連せる大切な教材である。聖句は、数多の教理信仰等を統括し、よくこれを記憶し、事に当りて直に発する命令たらしむべきものであるから、成るべく簡単にして口調よく且つその発表が有力なることが必要である。⁽²⁸⁾

③ 物語

興味を中心とし其の想像力を利用して、宗教的情操及び道德的情操を涵養するに用いられるものであって、特に、

下級なる年少者に重要な教材である。物語として用いられるものは非常に広汎であるが、今教材として用うべきものとしては、本生譚、經典中の譬喩、古談等、及び一般的童話である。⁽²⁹⁾

上述のような学科及び教材を鈴木はいかに配列しているであろうか。まず、分級については、幼年部の児童が比較的大きい場合は、幼年部（学齡前から尋常科二年迄）、少年部下級（尋常科三、四年）、少年部上級（尋常科五、六年）とし、または幼年部（学齡迄）、少年部下級（尋常科三年迄）、少年部上級（尋常科六年迄）、青年部（尋常科卒業以上）としている。⁽³⁰⁾ このような分級により、学科及び教材を徳目と併せて掲げたものを左に示す。⁽³¹⁾

学科別		教 話		歴 伝	童 話	唱 歌
青年部、師範部	幼年部	仏の存在、仏の愛、親切、身体に関する徳目。			ジャータカ、童話	唱歌
	少年部下級	仏の愛、善及聖句の歩。社会国家に關する徳目を主とす。	教義教授の初典の研究。聖人	半空想的の伝記及び史談	ジャータカ、童話、伝説。	程度の少々高きもの
	少年部上級	教義教授の初典の研究。聖人	類字由に關する事。	伝記及び史談	合理的童話、伝説。	同上
	青年部、師範部	教義教授、聖典の研究。社会、国家、人	類字由に關する事。	伝記及び史談	童話の取扱方法の研究	唱歌の教授法の研究

遊 戲 讃仏歌遊戯 動作遊戯 遊戯 動作遊戯（讃動作遊戯、団体遊戯、競争遊戯の研究）

このように鈴木積善は浄土宗門人として、最初に学科内容及びその教材配列を分級組織のなかで位置づけた人として、浄土宗の日曜学校史上忘れられない人物である。

鈴木積善が理論的に示した教話の内容と同様な方向性をもって実践されていた日曜学校の例として、増上寺日曜学校⁽³²⁾があげられよう。大正十一年頃の教話は、幼稚部ジャータカの話 恵の組（尋常科一、二年）釈尊伝、光の組（尋常科三、四年）仏弟子伝、望の組（尋常科五、六年）法然上人伝、青年部教義仏教概論という内容であったという。増上寺日曜学校の伝記教話は児童の側に教科書が与えられていたか不明であるが、尋常小学校の伝記の配列は浄土宗としては基本となるものといえよう。

三、教材・教案の編集

大正九年に、東京で第八回世界日曜学校大会が開催されるに及んで、キリスト教日曜学校のみならず、仏教日曜学校も飛躍的に発展を遂げるが、そのなかで注目すべき動き

としては、真宗大谷派が、大正十一年に『児童と宗教』(月刊)を社会課より発刊し始め、さらに同年十二月には、真宗大谷派日曜学校規程を⁽³³⁾発布したことである。即ち、「日曜学校ハ児童ノ宗教心を啓培シ円満ナル品性ヲ涵養スルヲ以テ目的トス」(第二条)、「前条の目的を達成センガ為メニ小学校及ヒ家庭ト連絡ヲトリ日曜日其他適当ノ日ヲ以テ宗教教育ヲ行フ」(第三条)とある。この規程は日曜学校、児童(教)会、コードモ会等、そのすべてに適用し、しかも、それらの統一を目的として発布されるものである。ただ規程の内容は、大正四年発布の本派本願寺のものとは差異はない。また、この年には、神根愍生が本派本願寺から『日曜学校教案』を刊行している。

このような真宗系の日曜学校の動きに対して、浄土宗も統一的な組織の確立及び教材、教案の開発が急務とされた。ついに、開宗七五〇年を前にした大正十二年、宗務所社会課が新設されるや、開宗七五〇年の記念事業として、日曜学校教師用説話材料、讃仏歌儀軌、婦人教材の作製が企画された。⁽³⁴⁾この企画には、顧問として、望月信亨、渡辺海旭、椎尾弁匡、委員として、鈴木積善(主任)、原聖

道、桑原随旭、藤田寛随、大村桂巖、西島義豊、岩野真雄、その他宗大社会事業研究室員六名が参加していた。同年六月七日、第一回協議会がもたれ、日曜学校教師用説話教材は、幼年、少年前期、少年後期とに分つ。作製主任として、原聖道があたり、主に外国の材料を収集し、西島義豊が一般童話、宗大社会事業研究室員諸氏が仏典に関するものの材料を収集する。刊行は二、三冊を予定していた。そして、翌大正十三年七月、ついに鈴木積善を編輯者として、浄土宗社会部編『仏教日曜学校教材 第一輯』と題されて刊行されたのである。

この教材は少年部上級用(尋常科四、五年程度)として編纂されたものであり、逐次編纂発行される各級別教材と関連し、「従来の所謂おはなしの会の域を脱し」(凡例)日曜学校における分級制の実現をもめざして編纂されている。その内容は、四月より翌年三月までの一ヶ月ごと四回の日曜日の教材を示し、三月のみは卒業式を含めて五回となっている。各日曜日の教材の基本的構成は、まずその日曜日の「徳目」が章題として端的に掲げられ、次に目的を支える「聖句」が経論より引かれ、さらに「目的」が具体

的に示された後、「話題」が示され、「説話」の全文が掲載されている。それが終ると、「徳目」そのものや、「説話」の内容について五問程度の「設問」が提示され、「資料」として明治天皇御製歌、さらに「聖句」が数種類補足され、最後に「話材典拠」が示されている。

このなか「徳目」は「これを理解せしむるのみならず、日常生活に於て実行せしむる」（凡例）ものであるとしている。この「徳目」は当時の国定修身教科書の徳目を基盤に、四恩、六度、さらには三心等が加味されて構成されている。ただ浄土宗としての特色ある用語は、少なく、「御忌」「共生」等であり、とくに「共生」の用語は、この企画の顧問である椎尾弁匡の影響によるものである。

また、最初に掲げられる「聖句」の引用文献は、「無量寿経」が十三回、「観無量寿経」が六回、「阿弥陀経」が一回と、浄土三部経が半数近くを占め、さらに善導大師の「観経疏」が二回引用され、これらを含めると「聖句」に關しては浄土宗的色彩を濃く出している。しかしながら、法然上人の御法語が関連聖句の一部を除いて取り入れられていないのはいかなる事情によるものか。浄土宗の日曜学

校教材としては疑問の残るところである。

次に「説話」の題材については、「ジャータカ」が十一回、「賢愚経」が六回、「勅伝」が二回、その他半数以上は経論から求めたものであるが、日本の説話や外国の童話もあり、とくにグリム童話からは四回も引いている。「説話」の内容として、浄土宗的色彩が濃いものは少なく、春秋の彼岸会や御忌のものぐらいである。

この浄土宗の『仏教日曜学校教材 第一輯』（以下『教材』と略す）発刊に遅れること十日余り、八月には大関尚之によって『仏教日曜学校教案』（以下『教案』と略す）〈中外出版〉が刊行されている。その内容については、村上尚三郎氏の詳細な研究がある⁽³⁵⁾ので、それに譲るとして、ここでは両者に見られる差異について見ておきたい。まず、『教材』の「徳目」の配列がいかなる体系をもっているのか不明確であるのに対し、『教案』の課題は月や週は指定していないが、配列順に「その課題の目的を遂行することに於て自己の修養、社会に対する徳義そして最後に自己の信仰と云うように漸次世俗の道徳から宗教の真諦への過程を辿る」⁽³⁶⁾ように配慮されている。これはすで

に見た本派本願寺の仏教日曜学校の目的に「本宗二諦の教義に依り特に児童の徳性を涵養する」と示されることの具体化であることはいうまでもない。また、『教材』の「聖句」は原文の書き下しのままであるのに対し、『教案』の「聖訓」は、原文の書き下しが示されたその上に、「意訓」が加えられている。さらに『教案』では、第一部聖訓篇は、「課題」に対する「聖話」があるが、必ず仏教的な背景から話がおさえられている。第二部教材篇は第一部を演繹した口演材料である。これら二部が尋常科対象であり、第三部歴史篇は尋常科終了のものを対象とし、釈尊伝、七高僧を含めた三国の高僧伝、及び親鸞聖人伝を含んで仏教史を学ばすものである。しかも、この三部が独立したのではなく、相互に縦横に連絡してとらえられる配慮がなされている。とくに第二部、第三部はやがて第一部に帰納され、同時に第一部の演繹されたものとして位置づけられている。⁽³⁷⁾このような『教案』に見られる配慮は、『教材』では全くなく、特に仏教史的な観点は欠如しているのである。

このように大関の『教案』と比べれば種々なる問題点も

あるが、浄土宗としての最初の『教材』が刊行されるに及んで、この事業の継続の必要が認められ、第二輯の編纂に与りかかることになるのである。第二輯は村田崇信を主任として編輯され、大正十五年三月『仏教日曜学校教材 第二輯』（以下『第二輯』と略す）と題して刊行されている。内容は『第一輯』の形式を踏襲しながらも、若干の新しい試みがなされている。とくに大関の『教案』に影響を受けたと考えられるところがある。即ち、『第一輯』では教材配列に関してコメントがなかったが、『第二輯』では、徳目の「配列は相互の聯絡の關係上多少の前後はあるも、大体に於て個人的なものより家庭的社会的国家的宗教的と順次する」（凡例）としている点である。これは先に述べた大関の『教案』の考えと近いものである。さらに『第二輯』では、小学修身教科書の巻一より巻四までの徳目、及び、『第一輯』の徳目との関連を記している。ただ、『第二輯』においては、「聖句」が最初に乃至二句引かれるのみで『第一輯』のような関連聖句を多く掲げていない。

このように浄土宗においては、大正末期にやっと二冊の『仏教日曜学校教材』が刊行されたが、この教材はあくま

で指導者側のものであって、児童に手渡される資料としての教材が併せて刊行されたわけではない。児童が持つ日曜学校の教科書としては、真宗大谷派では、『仏教読本叢書』（法蔵館）を、また、本派本願寺では、大正十四年、

『仏教日曜学校読本』（興教書院）を刊行している。とくに後者の教科書は尋常小学校一学年用から六学年用まで、各学年上下二巻からなり、さらに『中等仏教日曜学校読本巻一・二』の二冊が中等学校生徒用として提供された。これらは、国定教科書と連絡をとり、形も内容も共に交渉をもったものである。しかも、横に各学期、縦に各学年一貫した思想をもち、この『読本』を習得したものは自然に仏教の一般概念や、釈尊伝、浄土真宗の高僧や門流の人々を理解できるのである。この『読本』に対して、大正十五年四月より、『日曜学校研究』（日曜学校研究社）誌上に、各学年の教師用「読本教案」を連載し始めるのである。⁽³⁸⁾ 第一学年から第三学年用までを大関尚之が、第四、五学年用を神根愍生が、第六学年用を細川湊城がそれぞれ担当している。このような本派本願寺の『読本』及びその『教案』の開発は、仏教日曜学校が単なる子どもの興味に迎合する会

ではなく、宗門の教義を基盤とした「自教の教育主義」を展開させる独自の教育機関として位置づけられていく大きな役割を果たしたのである。

このような意味からすれば、浄土一宗において、『読本』のような教科書の開発の動きが大正期のみならず、それ以降においても全くなされていない事实は、「自教の教育主義」を宗門指導者が明確にとらえていないことの反映ともいえよう。それはまた、寺院の社会的活動を優先し、その活動を支える教義的基盤をともしれば疎かにする社会事業の姿勢から来ているのであろうか。

ともあれ、浄土宗の日曜学校数は、大正十二年に刊行された『浄土宗大観』⁽³⁹⁾の記録によれば、一六七が報告されているのである。

おわりに

以上、浄土宗の日曜学校について、主としてそこで教えられる教材の問題を中心に、その発展過程を断片的に述べてきたに過ぎないが、具体的な史料の欠如のために、二次史料によって多くの記述を展開したことは否めない。ただ

少なくともいえることは、明治・大正期に限っていえば、教材・教案に関しては、浄土宗は一步も二歩も本派本願寺のそれとは遅れをとっていたといえるであろう。

しかし、昭和期に入ると、浄土宗のなかでも特色ある教材・教案が出されている。昭和三年には、『仏教日曜学校教材第一輯』『同第二輯』の編纂と関わる『仏教日曜学校教材幼児用』が宗務所社会部から刊行されている。この教材は内山憲尚の手によるものであり、幼児用教材としては注目すべき内容をもったものである。また、昭和六年に刊行された『浄土宗布教全書』第二十巻、第二十二巻所収の「日曜学校教案」も、信機、信法、信仰生活という三つの大綱を立てて教案を組織している点など注目すべきものであるが、これらの内容の考察は他日を期したい。

註

- (1) 『児童学に基づける宗教教育及日曜学校』五二六頁。
- (2) 『日曜学校組織及実際』五二頁。
- (3) 福田行誠は明治一二年四月に増上寺に進董している。
- (4) 『日曜学校組織及実際』五三頁。
- (5) 『浄土教報』明治三十九年二月二六日第六八四号。以下仏眼少年会の記事はこれに基づく。
- (6) 明治三十九年二月の時点で三五名に出ず。

(7) 当時の少年会の会費は一ヶ月金三銭。

(8) 「本宗ノ教会ハ本宗ノ教旨ヲ信スル男女ヲ以テ組成ス」(第二条) 「本宗ノ教会ハ寺院教会寺院外教会ノ二種トス」(第三条) 八大正五年版『現行制規全聚』二五五頁Vとあり、仏眼教会は寺院外教会であった。

(9) 「浄土宗児童教化史要」(『児童教化のしおり』所収、一二頁)。

(10) 『浄土教報』明治四二年八月三〇日第八六七号。

(11) 「浄土宗教化史要」一二頁。

(12) 『日曜学校組織及実際』五四頁。

(13) 以下の記述は「日曜学校史上の人物」(キリスト教教育講座1『日本人とキリスト教教育』所収、二二九―二三〇頁参照)による。キリスト教の日曜学校は『日本日曜学校史』に詳しい。

(14) 以下の記述は『浄土教報』明治三十九年一月八日第六七七号による。

(15) 『浄土教報』明治四四年一〇月三〇日第九七九号。

(16) 筆者はこの教案及びカードを未見であるが、『浄土教報』明治四四年九月二五日第九七四号の宣伝文によった。

(17) 『真宗大辞典』第三卷一七二八頁。

(18) 『浄土教報』大正四年四月二日第一一五七号。

(19) 同右、大正六年九月一四日第一二八四号。

(20) 同右、大正七年七月二六日第一三二八号。

(21) 同右、大正九年八月二〇日第一四二六号。

(22) 『現行制規』（昭和九年一月現在）一〇六～一〇七頁。

(23) 『浄土教報』大正一〇年四月八日第一四五七号。

(24) この執行順序は、鈴木積善『児童宗教教育の理論と実際』第三編後編「日曜学校の経営法」の第九章執行の順序に示されるものと内容的に同じであり、鈴木のもものは宗教大学日曜学校のもを参考にしている。

(25) 『児童宗教教育の理論と実際』一六〇頁。

(26) 同右。

(27) 同右、一九九～二〇〇頁。

(28) 同右、二〇〇～二〇一頁。

(29) 同右、二〇一頁。

(30) 同右、一八二頁。

(31) 同右、二一一～二一二頁。

(32) 内山「浄土宗児童教化史要」二四頁。

(33) 『児童と宗教』第二巻第一号二八頁。

(34) 『浄土教報』大正一二年六月二日第一五四四号。日曜学校教材の企画は、社会部長長谷川白円による（『仏教日曜学校教材第一輯』はしがき）。

(35) 「仏教日曜学校に対する一考察」（『佛教福祉』第一号所収）

(36) 『仏教日曜学校教案』の「本教案の組立及び応用」一頁。

(37) 同右、二頁。

(38) 『日曜学校研究』誌に連載された教案は、昭和二年に各学年一冊づつの刊本として、仏教日曜学校読本刊行会から発行

されている。

(39) 『浄土宗大観』一八～二三頁。但し、日曜学校という名称のものに限っていない。

※ 尚、本稿作製にあたり佛教大学図書館、浄土宗文献センター所蔵の資料を使わせていただきました。

△参考▽
 仏教日曜学校教材配列表

七	六	五	四	月
4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	週
誠兄祖謙 先崇 実弟拝遜	朋公愛因 友益国(ニ)	因果動物愛 果応報(一)	救協降入 同誕校 濟致会式	第一輯
愉両至妄 盜舌誠語	放高勉正 逸慢学信	勇輕注意誘 氣率く惑	怠不一立 不撓不 情屈心志	第二輯
十一	十	九	八	月
4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	週
発懺看親 心悔病切	博惡吝忘 愛口齋必	彼瞋精儀 岸恚進牲	忍端立正 耐正志信	第一輯
懺他公共 人の迷 悔惑益生	惡朋從召 友友順使	兄弟親の 仲の教を守れ	衛元勤欲 生氣勉な	第二輯
三	二	一	十二	月
5 4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	4 3 2 1	週
卒用彼約妄 業 式心岸束語	偷嫉淫平 盜妬榮等	共御高忠 生忌慢義	慈勇勤知 善氣勉一	第一輯
求敬仏仏 様の御力 法の護	仏報忠愛 様の御智慧 恩君国	動看同親 物愛 護病情切	清忍喧寛 潔辱する大	第二輯